

男女互の心中を見せんとて共に死るを俗に心中といふ、官所の辭には相對死といひ、西土にては雙斃といふなり、

〔徳川禁令考後聚二十三〕男女申合相果候者之事

享保七年極一不義にて相對死いたし候もの 死體取捨爲弔申間敷候

但一方存命に候は、下手人

犬死

〔書言字考節用集八言辭〕犬死正者通呼稱犬

〔倭訓栞中編二〕いぬじに 死して功なきをいふ、與螻蟻何異などいふが如し、

〔明徳記中〕山名陸奥守、子息宮田左馬助、次郎七郎ニ向テ宣ケルハ、略中サレバコソ御分達ハ日本

一ノ不覺仁共ニテ有ゾヨト、只叶ハヌ所ヲ見テハ打死シ、遁ルベキ所ヲ知テハ命ヲ全シテ、後日

ニ本意ヲ達スルヲコソ、仁儀ノ勇士トハ申セ、是非ヲモ辨ヘズ、遁ルベキ所ニテ犬死ヲシテ、敵ニ

利ヲ付ル事ハ、加様ノ時ノ爲ゾカシ、未練ナル者共哉、ツレテ引ト叱ラレテ、兄弟ハ猪熊ヲ南ヘ落

テ行、

〔明良洪範二十〕采女堂 又曰、各無益ノ爭論ヨリ命ヲ捨テラル、ハ、誠ニ犬死トヤ云ン、サラバ忠

孝ノ道ニ立返リテ、雙方一和シ、向後忠義ヲ立テラレントナラバ、只今和談アルベシ略下

〔今昔物語二十九〕袴垂於關山、虛死殺人語第十九

今昔袴垂ト云フ、盜人有ケリ、略中 大赦ニ被掃テ出ニケルガ、可立寄キ所モ无ク、可爲キ方モ不思

ザリケレバ、關山ニ行テ露身ニ懸タル物モ无ク、裸ニテ虚死ヲシテ、路傍ニ臥セリケレバ、略下

〔日本書紀二十〕二十九年二月、是月葬上宮太子於磯長陵、當是時、高麗僧惠慈聞上宮皇太子薨、以

大悲之、爲皇太子請僧而設齋、仍親說經之日、誓願曰、略中 今太子既薨之、我雖異國、心在斷金、某獨生

之、有何益矣、我以來年二月五日必死、因以遇上宮太子於淨土、以共化衆生、於是惠慈當于期日而死

知死期

虚死